

村長・郵便局長を経た銀行マン

第三代伊予銀行頭取 渡部 七郎

元四国郵政研修所長
伊予史談会会員

山崎 善啓

一、渡部七郎の年譜

明治35・11・30 荏原村東方に生まれる
昭和3・3 東京帝国大学経済学部卒業

3・4 五十二銀行入行

5・4 荏原村村長

7・5 退任

荏原産業組合理事長

11・4 荏原郵便局長

16・8 退職・豫州銀行入行

16・9 銀行合併、伊豫合同銀行誕生、

22・12 取締役

27・3 大阪支店長

28・6 常務取締役

29・4 東京支店長

38・10 副頭取

44・10 頭取

58・6 会長



渡部 七郎

60・7 相談役
62・7 顧問
平成2・12 逝去(八十八歳)

二、村長 渡部七郎

渡部家は幕藩時代に庄屋であり、七郎の父、網興は村会議員や各種の公職を歴任し、公共のために私費を投ずるなど、村のために尽くした人であった。明治末期ころから二回、県会議員に当選、県会議長も務めた。

このような素封家に生まれた渡部は、村民の強い要請に応じて、折角入行した五十二銀行を二年足らずで退職し、昭和5年4月、地元荏原村の村長に就任した。とき

に28歳であった。渡部が村長になった昭和5年は夏から秋にかけて雨がほとんど降らず、各地に大干ばつの被害が生じた。荏原村でも収穫皆無が70町歩、5割以上減少が140町歩に及ぶ悲惨な状態であった。

当時、全国的に農村の不況が深刻化し、庶民の生活は窮乏のどん底であった。この時期の干ばつは農家自身の食糧にも事欠く有様となり、渡部村長はその救済策に不

眠不休の日々であった。加えて翌6年も、天候不順で農作物に大きな被害を与えた。このため、渡部村長は2か年続けて家屋税など税の徴収を免じたほか、個人としても給与の返上、小作料の免除など、村や村民のために精魂を傾けて努力した。

三、荏原郵便局開設、郵便局長就任

明治45年ころ、荏原村では村会において、久谷郵便局を荏原に移転してもらいたいという話が出て、村長・村会議員らが広島通信管理局へ出向いて陳情した。陳情理由は、久谷地区より荏原地区が戸数・人口とも多く、郵便貯金も多いなど、もったもんな事情を述べた。通信管理局では、久谷局が三坂峠を越えて久万に至る郵便通送上の中継地点としての地理的事情から、移転には難色を示し実現しなかった。

その後昭和5年ころ、渡部村長時代に郵便局誘致問題が再燃し、村長自ら広島へ出向き陳情したが実現できなかつた。

昭和10年に入り、郡内に郵便物の集配をしない三等郵便局が設置されていることを知り、地元有志に聞くと武知勇記代議士の世話だということが分かった。

当時、荏原村は政友会の地盤であり、武知代議士は民政党であったから、依頼し難い立場であった。そこで荏原村出身の武知代議

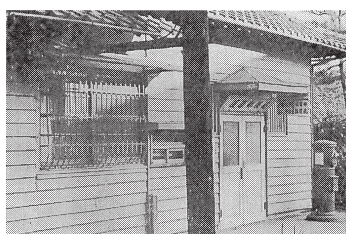
士の側近を通じて、渡部ら地元代表者が懇請したところ、気持ちよく引き受けてくれた。

渡部ら有志は、陳情書を広島通信局に提出するとともに、その内容を逐一武知代議士に報告し応援を願った。武知代議士は通信省と広島通信局に積極的に働きかけた。その甲斐あって10年9月30日、武知代議士から「荏原局ノコト都合ヨシ」と電報で通知された。

10年10月には広島通信局から現地調査があり、地況・局舎位置などを調査し、あわせて局長問題についても関係者と打合わせがなされた。村長はじめ関係者は渡部七郎が適任であると推せんし、同年12月、渡部は郵便局長に内定した。こうして11年4月1日、荏原三等無集配郵便局は開設された。

当時の三等郵便局長は相当の資産を有し、かつ局舎(土地・家屋)を無償提供しなければならなかつたので、渡部七郎が適任者として発令されたものであった。

当時の荏原郵便局は、郵便・貯金・保険のみの取扱いで、電話も電報もまだ取り扱ってなかつた。渡部局長は、村に全く電話のな



当時の荏原郵便局

村長・郵便局長を経た銀行マン

Shichirou Watanabe

いのは放置できない、ぜひ早急に開通させたいと願って、再三にわたり広島通信局に陳情した。その努力が実り、13年12月電話窓口通話と電報取扱いを開始した。村では祝賀会を開催して渡部局長に謝意を表した。

翌14年夏、広島通信局から監督課長が突然来局した。監督課長は渡部局長に「君のような若い東大卒が田舎の三等局長に坐っているのは惜しい。ぜひ通信局に来てくれないか」ということであった。渡部は驚いたが「私は郵便局長だけでなく、地元のために何かと世話もしているのでここを離れるわけにはいきません」と丁重に断った。監督課長は「即答は難しいかもしれないが今一度考えてほしい」と要請して帰った。

渡部局長は、14年暮には高等官待遇となり、15年の職員録に掲載されている。三等郵便局長が、採用後わずか四年足らずで高等官待遇となったのは異例であった。これは東大卒という学歴もさることながら、通信局が渡部の人物を見込んで厚遇し、何とか通信局に迎えたいという熱意の現れであったものとうかがえる。

四、銀行マン渡部七郎の誕生

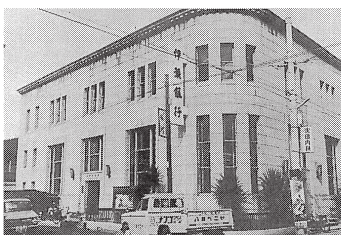
渡部の周囲は、彼を荏原の地に安住させておかなかった。昭和16年に入り、義兄の豫州銀行頭取佐々木長治が来訪し、「君の才能

を田舎の三等郵便局長で埋もらせるのは惜しい。銀行は近い時期に一県一行に合併する見込みだが、この際当行に優秀な人材を確保して合併に備えたい。ぜひ入行してくれ」と要請した。

渡部は考えた。このまま郵便局長で一生終わるのも本意でなく、広島通信局に転勤する気もなかった。佐々木頭取には二三日考えさせてほしいと頼み熟考した。その結果、渡部は頭取の熱意にこたえ、豫州銀行入行を決意した。

渡部は郵便局長退職手続、後任局長問題などもあるので、入行は二、三か月延ばしてもらった。幸い後任局長には従弟の渡部正興に内定できたので、同年8月退職し、直ちに豫州銀行に入行した。

豫州・五十二・今治商業の三銀行は、16年5月合併に調印し、16年9月伊豫合同銀行として発足した。渡部は湊町支店長を命ぜられ、21年5月まで約5年間で勤務した。戦災による支店焼失、仮移転、新築移転、戦後のインフ



豫州銀行本店(現伊予銀行八幡浜支店)

レと金融非常措置など多難な時代であった。しかし、この5年間は、後の銀行経営の中核に入っ

大いに役立った。その後の役職経歴をみると

- 昭22・8 総務部長
- 23・1 企画部長
- 25・6 人事部長
- 27・3 大阪支店長
- 29・4 東京支店長
- 31・1 考査部長

と要職に就いて手腕を発揮した。

渡部頭取在任中の44年から58年ころの日本経済は、高度成長から安定成長への構造変化を伴う激動の時代で、経営の舵取りは極めて難しい時期であった。渡部はこの時期、経営管理組織の全面改正と県外支店の新設にも取り組んだ。40年代の県外支店新設は次のとおり

40年名古屋、45年福山、46年大阪北、福岡、47年姫路、48年新宿
また、渡部頭取は「地域社会の繁栄があつてこそ当行の発展がある」という地域金融のあり方について、役職員を指導し地域の発展に寄与した。

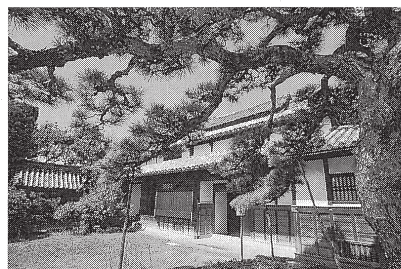
その結果、取引先は拡大し預金量も次のとおり飛躍的に増加した。
40年千五百億円、45年三千億円、48年五千億円、52年八千二百億円、58年一兆六千億円

渡部頭取は、銀行経営の最高責任者として常に大局的見地に立ち卓越した識見と実行力をもって、今日の伊予銀行発展の礎を確立したといえよう。

58年には頭取を退任し会長に就任したが、その間、県銀行協会会

長として、愛媛県金融界の発展に尽力されたほか、全国地方銀行協会の役員として地方銀行協会の政策決定にも参画した。

その他、金融界にとどまらず、地域への企業誘致や、社会福祉にも理解と協力を惜しまず、県公安委員会委員長、県社会福祉協議会会長等、数々の公職を歴任した。これらの功績により、48年勲四等旭日小綬章、59年勲三等瑞宝章が授与された。



渡部 七郎の生家
(国指定重要文化財渡部家住宅)

渡部は平成2年12月5日、突然逝去、享年88歳であった。同氏の伊予銀行葬は27日、県民館において盛大に営まれた。白菊で埋まった仏壇には温和な七郎氏の遺影が飾られ、遺族をはじめ金融関係者、政官界、企業トップら約三千人が参列、故人の遺徳を偲んだ。

〈参考文献〉

- 荏原村誌
- 伊予銀行五十年史
- 故渡部前会長追悼集
- 通信省職員録